

北欧

福祉と教育 街歩き 2013 白夜 はたらく道らく

写真・文＝蘭部英夫（全障研事務局長）



①コペンハーゲンの運河沿い
②③④丸太を断裁するはたらく彼ら



⑤⑥テキスタイル工房の彼女
⑦「憩いの場」ラウンジ
⑧グループホームの部屋

デンマークのコペンハーゲンから北に車で40分。ヘルシンガー市（人口5万人）は、『ハムレット』の舞台となったクロンボー城（世界遺産）のある町だ。数年ぶりに訪問した「仕事・体験センター」は、3カ所に分散して発展していた。

軽度の知的障害のある人たちが通うセンター（作業員110人、スタッフ35人 写真②～④）は郊外の田園地帯にある。丸太を断裁した暖房で使う薪は売れ筋のようだ。作業員の1割には賃金補填がされ、最低賃金が保障される。ほとんどの人は障害者年金（失業保険とほぼ同額）が所得の基本だ。

「みんなはそれぞれの作業場ではたらし、毎月の給与を楽しみにしている。ここは遊びに来ているのではなく仕事に来ている、という感覚」

「重い障害のある人たちが通うセンターは旧ホイヴァンゲン作業所（作業員225人、スタッフ65人 写真⑤⑥）だ。「朝のつどい」は楽しそう。ここではデイケアセンターと木工、テキスタイルの工房、厨房が「働く場」になっている。仲間との語らいや関係も楽しくてたまらない

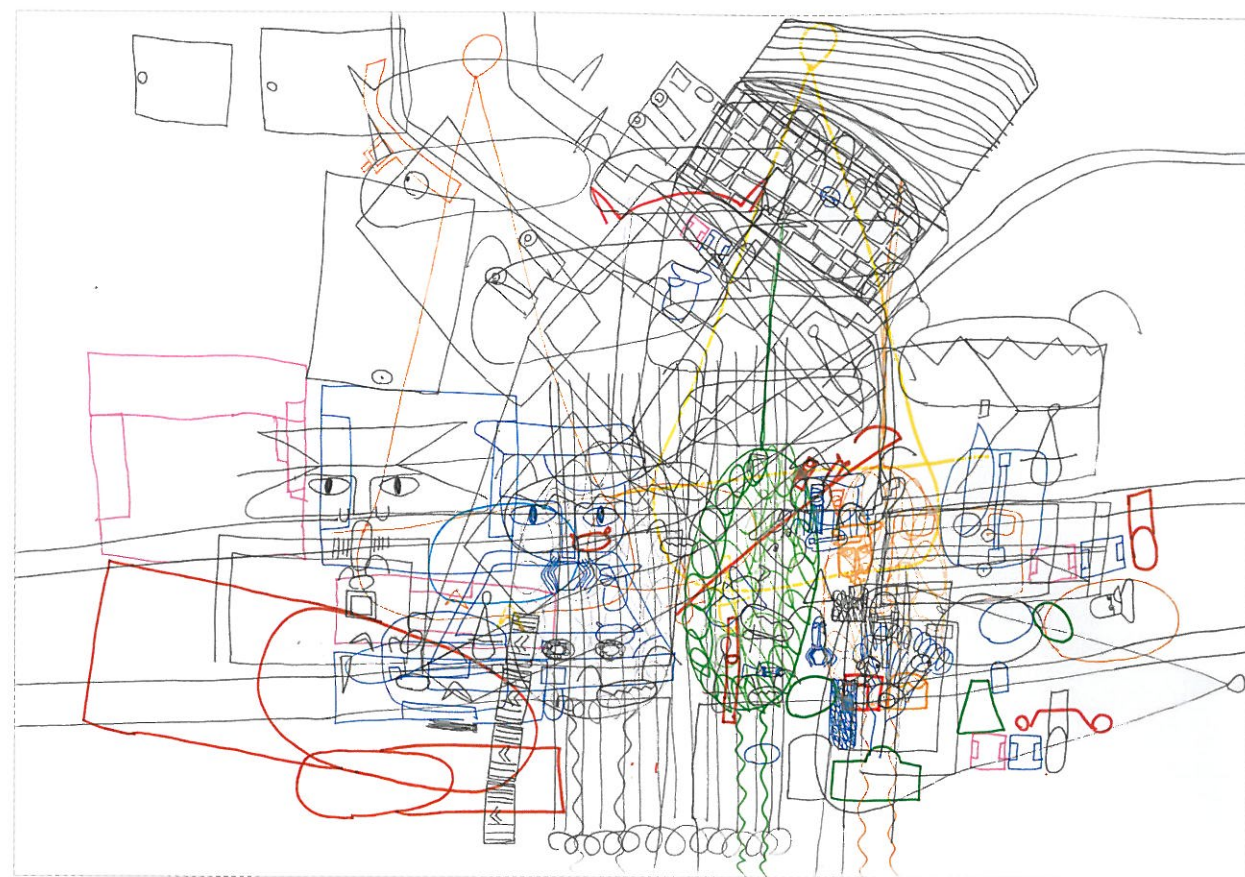
じ」とリーダーのクヌートが言った。

ようだ。

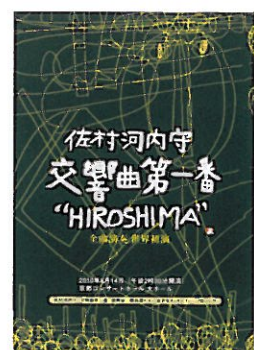
◆

町の住宅の一角に余暇活動の「憩いの場」があった。100人は独立した住宅に、100人はグループホームに住む。

ここには端を楽にするという「はたらく」がある。かけがえのない仲間がいて、安心できる住まいがある。



「いちど見たもの」 38cm×54cm 紙にサインペン



撮影：豆塚 猛

たかはたゆうさく
高畠優作 大阪府在住

出かける時は、いつもスケッチブックとサインペンを持ち、どこでもスケッチ。ベンチやカフェに座って無心に描いていると、「何を描いてるの?」と、知らない人から声をかけられる機会が増えました。言葉でのコミュニケーション手段をもたない彼にとって、絵は、内面を表現するだけのものではなく、彼と周囲をつなぐツールとなっていました。

「いちど見たもの」は、ポコラート全国公募展で入選した作品。公募展の入選をきっかけに、さまざまご縁をいただき、佐村河内守さんの演奏会『交響曲第一番 "HIROSHIMA"』初演のプログラムにも使用していただきました。「これは音符?」「指揮者だよね?」「原爆が投下された場面?」などなど、プログラムを手にした方々から、見る人によって、見えるものがまったくちがうことを教わりました。

目に見えるものなんて不確かなもの。これからも、表面からは見えない彼の力を引き出し、支えていければ、そう願っております。

(母・雅恵)

13095101 みんなのねがい9月号口絵

二折



⑨ クロンボース知的障害者住宅には、21人(7人×3ユニット)が住む。必要な居住空間の保障は国の責任だ。副施設長のベッチーナのところへは、みんながうれしそうにつきつぎとやって来る。